



Title	英語の筆記テストとヒアリングテストとの相関について
Author(s)	添田, 裕
Citation	長崎大学教育学部人文科学研究報告, 35, pp.47-52; 1986
Issue Date	1986-03
URL	http://hdl.handle.net/10069/32950
Right	

This document is downloaded at: 2019-04-22T02:24:50Z

英語の筆記テストとヒアリングテストとの相関について*

添 田 裕**

(昭和60年10月31日受理)

Correlations Among Written Tests and Hearing Tests in English

Yutaka SOEDA

(Received October 31, 1985)

I はじめに

朝日新聞(昭和60年1月23日付)の「論壇」に共通一次の試験の英語にヒアリングテストを導入することに反対する意見が寄せられたが、その後間もなく(2月5日付)同じ「論壇」にこれに反論する主張がのった。まず前者の要旨から紹介することにする。

「外国語の試験にヒアリングの出題は当然であるが、周到な準備と確固たる見通しと対策がないままに試験だけが先行すれば学校教育は大混乱をきたすであろう。なぜなら本物の英語の音声教育は学校教育ではできないからである。したがって自然なスピードによる本物のヒアリングテストは実施不可能である。そうだからといって日本人教師が話す程度のものにしては本当のヒアリングテストとは言えず実際効果はゼロに等しい。ヒアリングが大切だからといってすぐテストをするのは本末転倒も甚だしい。それよりも中・高校に多数の外国人教師を配置して英会話の授業を全面的に任せることが先決である。」

これに対しヒアリングテスト出題賛成論はと言うと「必ずしも自然な速度でヒアリングテストをしなくてもかなりの効果が期待できる。旧態依然とした学校英語教育の現状を打破し抜本的な改革を加えるためには大学入試にヒアリングを導入するのが最も効果的で、それ以外に方法はない。」というものであった。ついでながら朝日新聞では2月16日と5月15日にもヒアリングテストを含む英語の音声教育や試験のあり方についての記事を集めている。

さて先に紹介したヒアリング出題に反対する意見はあまりに悲観的かつ非現実的ではないであろうか。本物志向の気持はわかるが、日本人にとって聴き取り困難な音素や音変化があるからといってヒアリングテストはしない方がいいというのは、自国語話者なみの速度と正確さで英文が読めないうちは日本人に読解力のテストをするのは無意味だというのに等しく全く問題にならない。また言語の余剰性も考慮してもう少し柔軟な考え方をすべ

* 本稿は LLA 第25回全国研究大会(昭和60年7月26日, 福岡)のシンポジウムで口頭発表した原稿に加筆したものである。

** 長崎大学教育学部英語教室

きである。他方ヒアリング賛成論にいう「ヒアリングテスト導入以外に英語教育の抜本的改革は不可能である」という期待感によく分るし、ヒアリングテストのもつ大きな影響力も認めるが、本当にそうなるだろうかという若干の疑問の念を禁じえない。テストの効果はテストの内容、程度にもよるであろうし、受験する方の受け取り方にもよるからである。

また、これは筆者だけの観察ではないと思うが、ヒアリング力も英語による発表力も人並以上にある者(例えば高等学校在学中に海外留学の経験者)で、読書力が意外とないために大学入学後苦勞している学生がいる事実も忘れてはなるまい。

II ヒアリングテストと受験生

長崎大学教育学部英語科の入試では筆記テストに加えてヒアリングテストを約30年間実施しているが、このヒアリングが受験生にとってどの程度の負担になっているのか、そして受験生の準備の実態はどうかを知ることは上記の問題点とも関連して意義のあることであろう。アンケート調査の対象は英語専攻生35名である。

—— アンケートの内容とその結果 ——

1. ヒアリングテスト受験は負担でしたか。

①負担になったもの	22名 (63%)
②負担にならなかったもの	13名 (37%)

2. 負担になった理由。

①ヒアリングの練習不足と力不足	17名
②先生からのプレッシャー	2名
③テープを聴く必要	2名
④勉強方法と教材に困った	1名

3. 負担にならなかった理由。

①個人と(または)学校で練習した	4名
②当然あるべき試験だから	3名
③ヒアリングでは差がつかないと思った	3名
④得意だったから	1名 (留学経験者)

4. 負担に思った者の準備状況

①YMCAに通った	1名
②共通一次後、学校と個人で	14名
③FENを聴き続けた	1名
④個人でテープを聴いた	5名*
⑤面倒なので準備しなかった	1名

* 先生が「手おくれたが、これを聴きなさいと高1の教科書についたテープを貸してくれた」という1名を含む。

5. 負担に思わなかった者の準備状況。

①準備した	11名
○学校（と個人）で	7名
○個人的にラジオや映画で	3名
○外国人の個人指導で	1名
②準備しなかった	2名
○深く考えなかった	1名
○自信があったから	1名

この結果次のようなことが言えると思う。ヒアリングテストを負担に感じたものが約%であり、そのうちのほとんどが練習不足と自分の力のなさをその理由としている。そして練習開始の時期は共通一次終了後、練習は集中的に学校と自宅でテープを聴くやり方が%である。負担に感じなかった13名のうち大部分は、日頃学校や個人である程度練習した者である。当然といえば当然の結果である。面白いのは、開き直り的なものが3名いることである。高校生のヒアリング力は大差ないから、ヒアリングでは差がつかないと先生から聞いて安心したり、自分自身そう考えたそうである。いかなる形式であれ準備したものは35名中32名(91%)、そのうち学校で指導を受けたものが21名で、指導形式は共通一次後の集中形式が多い。

以上の事実から、テストを実施する側と受験する側の思わくの違いがあることがわかった。

入試にヒアリングテストを課す学校が少ない現状では、ヒアリングテストはまだ大変特殊なテストとみなされ受験生にとまどいと負担が見られる。

III 筆記テストとヒアリングテストの相関について*

まず断っておくべきなのは、1学年の定員が10名という大変少数の学科なので量的には決して十分とは言えないという事である。したがって統計的に断定的なことは言えない。ただし4年分の資料を処理したのである程度の傾向はわかると思う。筆記テストとして、共通一次テスト（KYOと略称）と長崎大学の筆記テスト（NAPと略称）の2つを、ヒアリングテストとしては、長崎大学教育学部英語科のヒアリングテスト（NAHと略称）とJACET-COLTDのヒアリングテスト（Form A）の2つを資料とした。共通一次テストについては説明の必要はないと思う。長崎大学の筆記テストは純粋な主観テストであり、英文の要旨を日本語で書かせる形式、下線部の日本語訳そして自由英作文形式のものから成っている。JACETのForm Aは純粋な客観的ヒアリングテストとしてかなり広く利用されているテストである。英語科のヒアリングテストは書取り、会話や物語の聴解などを含む主観的な部分と客観的な部分を持つテストである。テスト時間は約1時間。おそらく大学入試のヒアリングテストとしては日本で1番長いものであろう。また外人を含む数名の試験官が肉声で行っているのも1つの特徴である。

* 資料の統計的な処理と解釈に当っては、長崎大学教育学部数学教室の鷲尾助教授の助力に負うところが大きい。改めて謝意を表したい。

相関係数 (ρ) = 0 の時は無相関, ρ が 0 より少しでも大きい小さいければ相関ありと言えるが, 次のように 4 段階に解するのが普通である。

0.00	～	±0.20	ほとんど相関なし
±0.20	～	±0.40	低い相関がある
±0.40	～	±0.70	相関がかなりある
±0.70	～	±1.00	高い相関がある

Table 1

		KYO		NAP		NAH		JAC	
		HEIKIN	— HYOJUN	HEIKIN	— HYOJUN	HEIKIN	— HYOJUN	HEIKIN	— HYOJUN
56NEN	10MEI	149.40	…… 18.19	96.20	…… 15.32	94.20	…… 19.23	47.20	…… 18.85
57NEN	10MEI	160.70	…… 15.13	80.40	…… 13.99	106.20	…… 22.33	58.60	…… 27.74
58NEN	10MEI	164.70	…… 10.01	115.20	…… 13.36	85.00	…… 12.78	55.40	…… 24.95
59NEN	9MEI	156.33	…… 14.41	93.11	…… 18.76	102.89	…… 14.73	67.33	…… 11.31

Table 1 は KYO (200点満点), NAP (150点満点), NAH (150点満点), JAC (120点満点) それぞれの平均点と標準偏差を示したものである。ただし昭和56年～59年の4か年の合格者のみの資料による。また JAC は入学後に実施するので合格者の資料しかないことを付記しておく。Table 1 によって各年の合格者の学力, 個性がある程度わかると思う。特に JAC は同一問題なので大変参考になる。58年度の合格者は標準偏差から判断して他の3学年に比べ粒ぞろいと言える。

下の Table 2 は昭和57年～60年の4か年の受験生全員の平均点と標準偏差を示したものである。

Table 2

		KYO		NAP		NAH	
		HEIKIN	— HYOJUN	HEIKIN	— HYOJUN	HEIKIN	— HYOJUN
57NEN	14MEI	150.29	…… 29.23	75.29	…… 19.65	97.71	…… 24.94
58NEN	18MEI	160.50	…… 12.22	104.00	…… 17.71	69.44	…… 22.33
59NEN	14MEI	149.07	…… 28.79	83.14	…… 24.56	94.00	…… 28.16
60NEN	12MEI	138.33	…… 36.29	85.50	…… 25.88	98.67	…… 28.09

英語科受験生の学力および年度による変動の一般的傾向がわかったので次に4種類のテスト間の相関を検討することにする。相関係数として Pearson と Spearman の2つの係数を示した。Table 3 は合格者のみに関する係数である。

Table 3

**** PEARSON ****

		KYO—NAP	KYO—NAH	KYO—JAC	NAP—NAH	NAP—JAC	NAH—JAC
56NEN	10MEI	0.03	—0.02	—0.44	0.21	0.27	0.82
57NEN	10MEI	0.24	0.43	0.50	0.78	0.49	0.83
58NEN	10MEI	0.47	0.47	0.05	0.32	—0.32	0.72
59NEN	9MEI	0.51	0.19	—0.54	0.24	—0.00	0.37

*** SPEARMAN ***

	KYO-NAP	KYO-NAH	KYO-JAC	NAP-NAH	NAP-JAC	NAH-JAC
56NEN 10MEI	0.22	0.04	-0.43	0.16	0.12	0.82
57NEN 10MEI	0.07	0.24	0.41	0.80	0.51	0.84
58NEN 10MEI	0.57	0.46	0.27	0.24	-0.18	0.80
59NEN 9MEI	0.38	0.18	-0.43	0.18	0.11	0.39

Table 4 は受験生全員に関する数値である。

Table 4

*** PEARSON ***

	KYO-NAP	KYO-NAH	NAP-NAH
57NEN 14MEI	0.50	0.69	0.61
58NEN 18MEI	0.35	0.55	0.55
59NEN 14MEI	0.68	0.79	0.69
60NEN 12MEI	0.56	0.68	0.84

*** SPEARMAN ***

	KYO-NAP	KYO-NAH	NAP-NAH
57NEN 14MEI	0.25	0.53	0.68
58NEN 18MEI	0.35	0.54	0.62
59NEN 14MEI	0.70	0.63	0.59
60NEN 12MEI	0.41	0.49	0.78

データの分析

Table 3 と Table 4 を通して、Pearson と Spearman の係数間に有意差は認められない。

[KYO と NAP] : 両筆記テスト間の相関は Table 3 では低い相関からかなりの相関まで学年によりまちまちであるが、受験生全員を対象とすると相関がかなりあると言える。

[KYO と NAH] : Table 3 では、ほとんど相関なし～かなりの相関あり、までまちまちであるが、Table 4 では、かなりの相関～高い相関あり、と判断できる。

[KYO と JAC] : かなりの負の相関～かなりの相関あり、まで様々である。これは前述したように合格者のみのデータなので絶対的なことは言えない。

[NAP と NAH] : Table 3 では、低い相関から高い相関が見られ、Table 4 では、かなりの相関から高い相関が見られる。

[NAP と JAC] : かなりの相関から低い負の相関が見られるが、これまた絶対的なことは言えない。

[NAH と JAC] : 同じヒアリングテストと言っても形式・内容とも大変異なるにもかかわらず相関が高いことが Table 3 でわかる。

IV 結 論

NAH と JAC との高い相関からわかるようにヒアリングテストの形式・内容はあまり気にしなくてもよいと言える。つまりヒアリング力を見るテストであればテストとしての機能を果たすようである。ヒアリングテストの出題形式にあまりに慎重な傾向が英語教育界に見られるのは残念である。Table 4 について見た通り、KYO と NAH、NAP と NAH の相関はかなり高いことがわかった。つまり筆記テストに強いものはヒアリングテストにも強いと言える。（しかしヒアリングテストをしなくてもいいという意味ではない。）一方、Table 3 で見たように合格者では相関が低いということは、合格者という偏った集団ではヒアリングで差がつくということを意味している。つまり合格の順位にかなりの影響力をもっていると言える。（特に配点が多い場合にそうである。）

ヒアリングテストを全国規模で行うことには基本的には賛成する。その理由は、まず受験生の数が多い程、筆記テストとヒアリングテストとの相関が高くなることが予想できるし、発表の前段で見たような泥縄的な準備や受験生が 1 人で悩むことがなくなるであろうと想像するからである。しかしヒアリングテストをすることで英語教育は終わったわけではない。大学に入ってから教育、学生個人個人の努力がなければ折角のヒアリングテストもそれだけで終るおそれがある。

参 考 文 献

- 稲村 松雄, 「評価と測定」(研究社, 1970)
大内 茂男 (編), 講座・英語教育工学 第五巻「研究と評価」(研究社, 1973)
肥田野 直, 「心理教育統計学」(培風館, 1977)
岩原 信九郎, 「新教育統計法」(日本文化科学社, 1970)
Allen, J. P. B. & A. Davies (eds.), *The Edinburgh Course in Applied Linguistics*, vol.4 (Oxford University Press, 1977)
Carroll, J. B., *Lectures on English Language Testing and Teaching* (Taishukan 1972)
Heaton, J. B., *Writing English Language Tests* (Longman, 1975)